

## Kawasaki のモノづくり

人に役立つもの、社会が求めるもの。  
すべては、その原点からはじまっています。

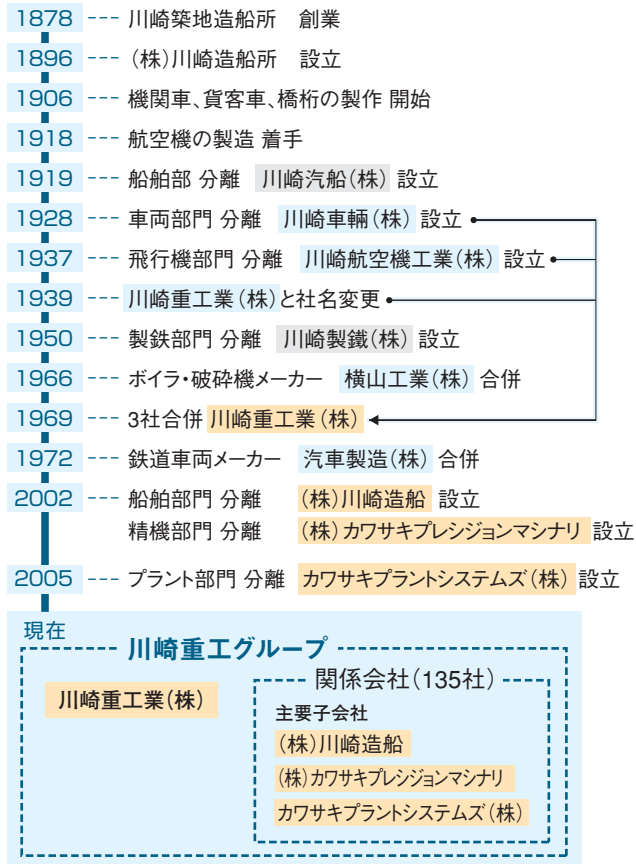
周りを海に囲まれた日本。当社の創業者・川崎正蔵は、海外との交易と、それに必要な新たな船づくりこそが、わが国の発展と社会の繁栄につながるものと考えていました。そして、従来の大和型船よりも安定性に優れ、船内が広く、速度も速い西洋型船に強い関心を抱くようになります。これが近代的造船業に端を発した当社のはじまり、原点です。

以来、当社は人に役立つもの、社会が求めるものを次々と形にし、陸・海・空にわたり事業を展開する総合システムエンジニアリング企業に成長しました。

私たちはこれからも、変わらぬモノづくりの原点を見つめ、社会の新しい価値を創造していきます。



## 川崎重工グループのあゆみ



## 編集にあたって

本報告書は、当社の環境ならびに社会活動を広く皆様にお伝えするために、1999年から毎年発行しています。今回の編集にあたっては、次のような考えのもとで行いました。

- 今回より「環境報告書」を「環境・社会報告書」と改め、社会性報告の充実を図りました。
- まず当社の考えや概要などを紹介し、そのうえで環境報告では、当社製品が環境とどのようなかかわりを持っているのか、外観からではわかりにくい、製品のライフサイクルを通しての環境配慮の内容にスポットを当てました。社会性報告では、社会、お客様、従業員とのかかわりについて紹介しています。
- レイアウトをはじめ、写真・図表の挿入、用語解説など、「見やすい、読みやすい、わかりやすい」をモットーに編集しました。また、詳細データなど、誌面の都合上、掲載できない部分については、ホームページで紹介しています。合わせてご覧いただければ幸いです。http://www.khi.co.jp/earth/index.html
- 本報告書制作にあたっては、環境省の「環境報告書ガイドライン(2003年度版)」を参考にしました。

**対象範囲** 川崎重工業(株)および主要子会社3社(川崎造船、カワサキプレジジョンマシナリ、カワサキプラントシステムズ)。一部に海外事業所も含まれています。なお、2005年4月に破砕機部門(八千代工場)が分離独立し、報告対象範囲外となったため、経年変化が比較できるよう、データについて過去にさかのぼって除外しています。

**対象期間** 2005年度(2005年4月1日～2006年3月31日)。  
ただし、一部に2006年度の活動も含まれています。

**次回発行** 2007年7月。その後も年度報告書として、毎年1回発行する予定です。

## 目次

### ◆川崎重工グループについて

- 1 Kawasaki のモノづくり
- 2 川崎重工グループのあゆみ 編集にあたって
- 3 社長あいさつ  
環境保全とビジネスの両立を目指して
- 5 経営姿勢  
社会から信頼されつづける企業であるために  
経営の基本理念 中期的経営戦略  
監査役会+内部監査
- 6 コーポレートガバナンス コンプライアンス
- 7 会社概要

### ◆特集

- 9 環境のために  
エネルギー利用の未来のはじまり  
(大型ニッケル水素電池「ギガセル」への期待)
- 11 社会のために  
世界平和の願いを Kawasaki の技術に託して  
(対人地雷探知除去システム実用化へのステップ)

### ◆環境報告

- 13 環境経営  
持続可能な社会の実現を目指して  
環境憲章  
川崎重工グループ中長期環境ビジョン「2010年のあるべき姿」  
環境管理体制
- 14 環境・社会への貢献を目指して  
事業活動による環境負荷
- 15 中長期環境ビジョン「2010年のあるべき姿」に向けて  
(環境経営活動の実績と評価)
- 17 環境会計  
2005年度環境会計集計結果 環境活動の自己評価
- 18 環境負荷データ
- 19 環境マネジメントシステム(EMS)
- 21 環境製品  
ライフサイクルでの環境負荷低減への取り組み  
(汎用機部門の取り組み)
- 23 (二輪車における循環型社会に向けての取り組み)
- 25 (製品分野ごとの取り組み)
- 27 環境を守るための製品と技術
- 29 環境生産  
生産時の環境負荷低減に向けて
- 31 各工場における環境負荷データ

### ◆社会性報告

- 33 社会とともに  
Kawasaki の心と技術を社会で役立てたい  
(社会貢献活動)
- 34 さまざまな対話を通じて、より親しまれる企業へ  
(社会とのコミュニケーション)
- 35 お客様とともに  
お客様のために 私たちの使命と責任
- 37 従業員とともに  
いきいきとした職場へ
- 38 職場の安全づくりと健康づくり